L’influence du sujet dans le langage. JE et WATASHI

1) L’influence du sujet dans le langage « Je et WATASHI »
言語と自己表現・自我形成の関係性について

2) Pourquoi nous sentons le malaise quand nous sommes dans une autre société culturelle
母国語ではなく他言語を主流とする異文化の経験の中で、なぜ人は居心地の悪さを感じるのか。発症 la décompensation との関連性はあるのか。

3) Plan
自己のイメージや自我形成について考える＝鏡像段階（ラカン）
自己と他者との関係で自我が脅かされる経験について対照関係論から
日本語的、仏語的主語特性からの検証

4) Le point de vue développementale du Je « Image de soi »
私 « je »と他者 « l’autre »と自分の姿 « moi »を認知する過程を、鏡像段階で説明する。人は鏡を見たその時から徐々に自分の姿を象徴的に認知する。次いで、理想の自分 le moi idéal も形成する。現実の自分と自分のありたい姿との差を埋めるためにこの le moi idéal が象徴されるという。私という姿は社会に適合していくために形成されるが、所為それは象徴された知識にしかすぎない。

5) La relation objectale
自分、私がいるということは他者がいる。そこで人は他者との関係を結ぶ。他者と自分の関係で自我が揺るぐことがあるが、それについて述べる。

<u>対人関係論についての簡単な復習</u>
妄想分裂ポジションは赤ちゃんが０から３ヶ月の間に体験する人間関係形成法の一つ。この時期の人は自分と他の人、物との関係間に違いがない。つまり、自分というものの続きがあるだけ。原始的防衛法で自我を守り、精神病的な防衛法はここで形成構築される。
次に、抑うつポジションでは自分と他人の境目が出来始める。ここではすでに母親の bon sein が自己に同一化されている。

抑うつポジションの経験において
日常の中で、自分が知っていた良い側面、自分を守ってくれていた、自分の自信や大切にされていたという感覚を与えてくれた物が、ある瞬間崩れる経験がある。例えば、母親の瞳、声のトーン、行動レベルでの優しさ、撫でる、プレゼントする、世話をする « servage » など。知っていた世界が崩壊し、喪を乗り越えなければならない状況(travail de deuil)を指す。
これは特に人生の分岐点や新しい環境に馴染まなければならないときに経験する時が多いと言われている(Gammill ;2006)。
ここで、相手や経験への不信感が募る。それに対して罪悪感を抱いたり、ときに相手に攻撃を受けている、大切にされていないのではないかという妄想的な働きを起こすこともあるという。こういった原始的な自我防衛を使うことがあることを退行とメラニークランは説明し、だからこそ人は抑うつポジションと妄想分裂ポジションを行ったり来たりすることがあると説明している。

フランスにおいて、新しい環境に馴染む中、日本で経験した温かい経験、優しさとフランスにおける優しさに対する価値観や哲学は異なる。これがひょっとすると何らかの精神的不適合の発症を説明できるのではないだろうか。

6) Watashi « Sujet »

優しさや愛に関して、日本では相手への配慮、適合してゆくこと。自分というものをどの場面でも同じように見せるのではなく、それぞれに合った形で見せることが優しさであるということ。相手への尊敬、立場への思いやり。母親の特別な愛と甘えを経験した子ども。現代の核家族化。否定ということ、違いを経験するよりも和や空気を大切にす

る文化。言わなくても相手へどう対応すれば良いかわかるきがするほどの教育と継続的文化。異文化的混ざりのない地理的な特徴。
全てにおいて主語、私の多様性に関係していると理解する。適合すること、それは相手を愛し思いやること。日本のそう言った文化的背景が存在していると考える。
自分の姿は相手によって変容し、変容することが、愛であること。自分を確立しすぎず、柔軟に変容させ、言わずとも空気を読んで思いやる日本文化的美徳。
日本における鏡像段階の理論をもとに説明される Moi や je は、鏡に映ったそのままや現実と自身の差によって起こる葛藤からの理想の探求などを枠をこえたものであり、もっと環境によって変容するものであると予測する。

しかし、フランスにおいて、自分を表現し、立ち向かい、勝ち取る権利と戦う自由を持つということが良しとされる。人権の国であること。違っていることが当たり前で、自分が正しいことが当たり前であるということ。違っていることが受け入れられている国で、だからこそ自分は不変的で変動的ではないということが可能である国。フランスの思いやりは、相手の立場に立つこと(mettre à la place de l'autre)で、思いをやることではないこと。その文化的背景が、自分の不変性が主語に表れているということ。自分が変容することもないので、自分がどんな姿なのか意識して考えるまでもないほどに固定化していること、つまり自分の姿が考えるまでもないほどにはっきりしているということ。おそらく幼少期から、自分が何を求め考えているのか自分ベースに考える、自分の意見を述べることが教育的背景にもあり、それが自分の姿の固定化につながっている。
主語が一つであることで、自分のイメージも不変になる。

主語が固定化された国での会話子供編
泣いている子供がいたとして・・・

Do you have a nap today ?
I didn't.
Well, you need one.

直訳
あなたは今日はお昼寝したの？
私はしてない。
じゃあ、あなたは一眠り必要じゃないか。

このような会話になることは日本語ではない。

実際を想定した会話

今日はお昼寝した？
してないよ
じゃあ今からお昼寝したほうがいいね。

これらの特徴から、主語が一つである国ではあなた、私という個がはっきりしていて違いもはっきりしている。つまり昔から自分の姿が他と違っていることが当たり前で、固有の姿があることが自然に無意識に出来上がり、固定化していく可能性がある。自分と他者という二つの要因が葛藤の原因になることが多いだろう。

しかし、日本はどちらかというと状況的説明。今日は昼寝というものをしたのか否か、そういうことがあったのか。そういう状況はなかった。してないよ。と、あなたと私という分かれ目がはっきりしない。つまり、自他の違いがあまり強調されておらず、それぞれが理想や平穏に向かって適合していくことが優先されている印象がある。自他の間で葛藤が起こるというよりも、自分と他人というものが存在するという現実と適合していきたいという理想や妄想との葛藤が起きやすいのではないのだろうか。

7) Hypothèse

① 主語が一定である、また、主語を使う回数が多いことで、自分のイメージが想像されやすい。

② 自分が存在する、はっきりすればするほど、他者の存在が大きくなる。しかし、自分よりも状況が優先されると、自他がはっきりせず、精神病的な特徴を持つことが優遇される。つまり、変容的になること。

8) Observation

① 自分の考えを日本人の患者さんはなかなかいうことができない。思いつきもしない。抑うつ的な人は、状況が過ぎ去るのを待つような、非常に自閉的な態度を保つ。
② 常識に対して強迫的に何が普通であるのか信念が固まっている人がいる。
③ 日本で禁止事項が多すぎる。あちらこちらに注意書きがある。他の人の迷惑にならないように、という言葉がよく使われている印象。ここでいう他の人は個人ではなく状況的なものであると理解できる。日本の他、は定義が大きい。
④ 他者と共存するための礼儀が多い。そのため、常識的であるかの確認をするような行動もときに見られる。他の人の目線を気にしたり、声を気にしたり。

9) Expériance personnelle

① 日本＝授業において発言することは場を乱すことになるかもしれない。自分で調べてもわからないことがあれば放課後先生に聞きに行こう。
② フランス＝授業で発言して、モチベーションを見せることができる。放課後先生に聞きにいくことは、先生の個人的な時間を邪魔することになる。授業内でしっかり学ぼう。

10) Le mécanisme dynamique du moi n’est pas identique à celui d’occident chez les japonais

自分が変容するのが当たり前の社会で、フランスにおける確固たる自己が日本人に当てはまるのではないということ。

フランスにて日本人が適応すべき居心地の悪さは、自他の分離を経験する機会が多いということ。そもそも、適応が重要視され、分離というもの自体が曖昧な社会で、なんなら分離はどちらかというと孤立を意味する日本社会でのフランスの自己確立的個人社会である文化的それは、日本人にとってトラウマとなりうる経験である可能性があるということ。

La discussion

Le slef は変動する。偏るのでもなく、欠けるのでもなく、変動する。

L’autre n’est pas l’autre comme en occident. Le sens est plus large, flou au Japon.

L’histoire, la religion, l’éducation etc … le facteur environnemental joue un rôle dans la construction du moi qui diffère par rapport à l’Europe.

- La société individualiste « l’enveloppe du moi est plus dur et définitif »
- La société collectiviste « l’enveloppe du moi est flexible selon la situation »

Le shema de soi : https://fr.wikipedia.org/wiki/Sch%C3%A9ma_de_soi

過去のディスカッションとの関連性

テーマ：空気と常識
関口さんがおっしゃっていた、問題の一つの大きな核はコミュニケーション不足であるということ。